

2021年12月9日取材

福岡県

産地ルポ

ホウレンソウ



↑「寒兵衛」の生育を調査するJAみい荒巻衛岐さん(右)と小坪さん(左)。高値となる12月に量をしっかりと出荷できれば、その価格がベースになるので、生育は気になるところ。



↑「寒兵衛」



↑「徳兵衛」



↑JAくるめ荒巻さん(左)と話す鶴さん(右)。価格の安定するホウレンソウだがこの2年コロナの影響で単価が上がってこないと今後の回復に期待。

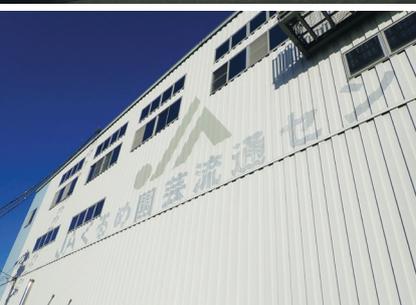
「徳兵衛」「寒兵衛」はタキイ品種では最高レベルのべと病レース17と「福兵衛」「伸兵衛」にはないレース13の抵抗性も

「徳兵衛」「寒兵衛」導入の理由はべと病対策だといいます。昨年はずと病に悩まされた痛い経験からです。「飛んできた菌にまけた」と無念そう。今作前には土壌消毒もすでに終えた小坪さん。「徳兵衛」「寒兵衛」はタキイ品種では最高レベルのべと病レース17と「福兵衛」「伸兵衛」にはないレース13の抵抗性も

### JAみいの「寒兵衛」

筑後川をはさむ、九州のホウレンソウ産地久留米市  
JAみいとJAくるめ  
べと病対策に寒兵衛と徳兵衛を導入

(編集部)



### 筑後川流域の恵まれた条件下で栽培されるホウレンソウ

今回ご紹介するJAみい、JAくるめの管内は筑後川流域、筑後平野に展開する野菜生産に適した土壌条件、福岡市の消費地に近い地理的条件を生かし、米や麦、野菜、果物などの生産が盛んです。多くの葉物類も栽培されていますが、ホウレンソウ栽培も盛んで、夏場を除いて安定的に高品質な栽培が展開されています。

JAみい管内は福岡県の中央部、筑後北部農業地域の西部に位置し、筑後川流域の北部に展開する平坦地です。小都市、大刀洗町、久留米市の一部(旧北野町)の2市1町からなり、経済地帯は平地農村に区分されます。福岡・久留米都市圏のベッドタウンとしての住宅用地等の造成が急速に進む田園都市です。ホウレンソウの出荷量は約650tです。

JAくるめは、田主丸町、三瀨町、城島町を除く久留米市域が管内で、出荷量は約400tに上ります。どちらの地域も水田裏作作物としてホウレンソウが導入され、排水性・保水性にすぐれた土質と西南暖地の特性である6カ月程度の長い無霜期間を生かした露地栽培を中心に作付けされています。



### 地域概況



↑JA A1の出荷の様子。例年10月日量350～400ケースからスタートし、12月には1500ケース規模となるが、2021年は雨不足で6割程度の出荷で推移。



↑11月2日播種で2月10日の「寒兵衛」。トンネル栽培で生育促進。

ある安心感からの導入です。広い範囲で露地栽培されている産地の宿命か、どうしてもべと病菌はゼロにはなりません。秋作の終わった「徳兵衛」と生育中の「寒兵衛」は今のところ発病はありません。家族経営で切り盛りする小坪さん。高値が見込める年末に向けてホウレンソウを途切れることなく出荷することが大事だといいます。「秋に栽培した『徳兵衛』は作業性もよかったです。『寒兵衛』との違いといえば葉数型で葉が大きめなので、防曇袋詰めの際、朝の露切れが遅く『福兵衛』よりは収穫後

乾くまで時間がかかるくらいですね。濡れたまま袋詰めすると乾いた時に袋の中で残った土汚れが白く目立ちクレームになる懸念があるそうで、細心の注意を払っておられます。

「現在生育中の『寒兵衛』は、12月半ば露地の低温下では色は濃いですがややロゼット気味には感じます。状況見てトンネル被覆をしますがそれからですね」

「寒兵衛」は今回、11月中旬まで播種を行い、3月上旬まで収穫を行ったそうです。昨年の厳冬下で折れやすい個体も出ましたが、3〜4株で1束ができるので収量は大変増えました。

いづれにせよ、「徳兵衛」「寒兵衛」ともべと病対策で安心できると期待されています。年明け気温上昇下で再度「徳兵衛」を作付け予定とのことその様子に期待して圃場を離れました。なお、小坪さんは夏場もお盆時期にまいりて9月10日出しのホウレンソウにも取り組まれていて、「晩抽サマースカイ」と「サマースカイR7」を栽培しているそうです。「M3万粒を播種機『こんべえ』でまきますが、高温期でも発芽がよかったです」とのこと。さらに、タキイのホウレンソウは、袋詰めする内職さんが下葉がとりやすく作業しやすいと喜んでくれるので箱数が出てありがたいと喜んでいただいています。

## JAくるめの「寒兵衛」「徳兵衛」

「寒兵衛」の圃場をご案内いただいたのはJAくるめ営農事業部ホウレンソウ担当の荒巻隆治さん。

JAくるめホウレンソウ部会は露地栽培を中心に62名、60ha。販売額は2億4000万円、3億が目標です。10〜11月はケース2000円の価格で推移。昨年は1月上旬5000円の高値もありました。JAの出荷量として日量を出す方は1000ケース中500〜600ケースは契約出荷という方が多く最近では契約出荷の率が高まっています。

流通センターからほどなく到着したのは「寒兵衛」を収穫中の鶴利光さんの圃場です。16時も回れば日が傾くこの時期、圃場に乗りに乗った軽トラ横で一人黙々と収穫をされていた鶴さんでしたが、ニコニコ笑顔で収穫の手を休めていただきました。

収穫中の「寒兵衛」は10月11日まきのもので、年末にかけてホウレンソウの単価が上がる時期、「出来には満足しています」と開口一番。これまでは暖冬傾向を見越して、冬期も秋から引き続き「福兵衛」を栽培されていましたが、昨年べと病の発生が見られたため、抵抗性レース13、17をもつ「徳兵衛」を秋どりに、「寒兵衛」を冬どりに導入され

ました。さらに、「寒兵衛」のあとは春に「徳兵衛」を予定するそうです。秋の「徳兵衛」でべと病の発生が見られなかったことから春も再び「徳兵衛」で対策というわけです。2〜3月は例年価格が下がることから、荒巻さんもこれからの高値の時期に、来期契約出荷の価格を交渉しておきたいということで、収穫中の「寒兵衛」の役割は大きいようです。

JAくるめ管内では、3月下旬までべと病の被害を受けていないそうです。ここまで大きなクレームもなく「徳兵衛」は定着していきだろうという荒巻さん。これから4月の出荷まで気を引き締めておられます。



↑濃緑な「寒兵衛」。



↑「徳兵衛」のハウス栽培。(2022年2月22日播種、3月30日撮影。出荷まであと2週間ほどの様子)